

大和高田市教育委員会 埋蔵文化財発掘調査概要報告

かん山古墳 1次調査

2003年3月

大和高田市教育委員会

かん山古墳 1次調査

2003年3月

大和高田市教育委員会

例 言

1. 本書は奈良県大和高田市築山487に所在する、かん山古墳の第1次発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は2002年度国庫、県費補助事業として大和高田市教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、2002年10月2日に開始し、断続的に進行して2003年2月28日をもって終了した。

4. 調査組織は下記のとおりである。

大和高田市教育委員会

教育長 田中隆彦

事務局長 皆己親重

事務局次長 島田昌彦

生涯学習課長 松浦一弘

文化財係長 塩野谷博司

技師 前澤郁浩（現地調査担当）

吉田貴子 松村一美（測量、内業整理参加者）

大和高田市公園緑地課長 北 昇

課長補佐 阪田保彦

調査協力者 吉村芳俱（奈良県文化財保護指導員、大和高田市文化財を考える会長）

岡野弥須司、勝谷芳司、白鳥嘉一（以上 築山地区総代）

高嶋和美（株近畿日本鉄道 大和高田駅長）

（株近畿日本鉄道、奈良県高田警察署

5. 調査にあたり、下記の諸機関、諸氏にご指導、ご助言を賜った。記して感謝したい。

奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、

大和高田市文化財保護審議会、大和高田市文化財を考える会、

宮内庁書陵部

網干善教、石野博信、泉森 皎、近江俊秀、小栗明彦、河上邦彦、西藤清秀、

清水真一、寺澤 薫、平松良雄、堀田啓一、松田真一、山下隆次、森下浩行

（50音順）

徐 賢珠（大韓民国 全南大学校博物館）

田 名利（中華人民共和国 南京博物院考古研究所）

6. 本書の執筆、編集は、前澤が担当した。

目次

1. かん山古墳の位置と周辺的环境	3
2. 調査に至る経緯	5
3. 調査の成果	5
第1トレンチ	5
第2トレンチ	6
4. まとめ	12
図版	13

挿図目次

かん山古墳と周辺の古墳	4
かん山古墳測量図(第1、第2トレンチ設定位置)	7
第2トレンチ テラス検出状況	11
第2トレンチ 埴輪列立面図	11

1、かん山古墳の位置と周辺環境

奈良盆地の西に横たわる洪積台地・馬見丘陵は、大和川の流れる北葛城郡河合町を北端とし、大和高田市の北西部を南端としている。丘陵の特に大和高田市域部分は、開析谷に挟まれた尾根が丘陵中心部から裾に向かって幾筋も延びるという、起伏に富んだ複雑な地形を呈している。

馬見丘陵には盆地側でもある東側を中心に数多くの古墳が築造されており、文字通り馬見丘陵古墳群と称されている。古墳群はいくつかの小さな群に分けられるとされるが、大和高田市域に該当する丘陵南端域には、築山古墳を最大とする一群を見ることができる。全長220mにおよぶ大前方後円墳・築山古墳は、南側の盆地に眺望の開けた丘陵上に、主軸をほぼ東西方向に向けて横たえている。近年の宮内庁の調査成果(注①)をもとに、築造時期が4世紀末にまで遡る可能性が指摘されはじめている。築山古墳には、かん山古墳をはじめ比較的大規模な円墳が近接する特質がある。過去3カ年にわたる調査で直径96メートルの大型円墳であることが判明したコンピラ山古墳は、前方部東側の丘陵斜面に存在し(注②)、直径50mの円墳茶臼山古墳は、後円部南西側の尾根上に築造されている。そして今回調査されたかん山古墳は、築山古墳の北側、築山の主軸に直交するように南北に向けて延びる尾根上に築造されている。

築山周辺にはこの他にも、狐井塚古墳、大谷今池古墳、インキョ山古墳、古屋敷古墳等、中期から後期にかけての古墳の分布を丘陵の尾根上に見ることができる。しかし築山一帯は早くから宅地化された地域で、調査をされないまま破壊された古墳があったと思われること、築山古墳の南約300mの、丘陵の西斜面や沖積地一帯に広がる池田遺跡では、数多くの埋没古墳が条里遺構の地下から発見された(注③)ことから、周辺にはさらに多くの古墳が築造されていたことを推定できよう。

注 ①徳田誠志、清喜裕二 「磐園陵墓参考地墳埜裾護岸区域の調査」

書陵部紀要第52号 宮内庁書陵部 2000

②前澤郁浩、松本美賀「コンピラ山古墳3次調査報告書」

大和高田市教育委員会 1993

③前澤郁浩「埋蔵文化財調査報告ダイジェスト 池田遺跡」

大和高田市教育委員会 2001

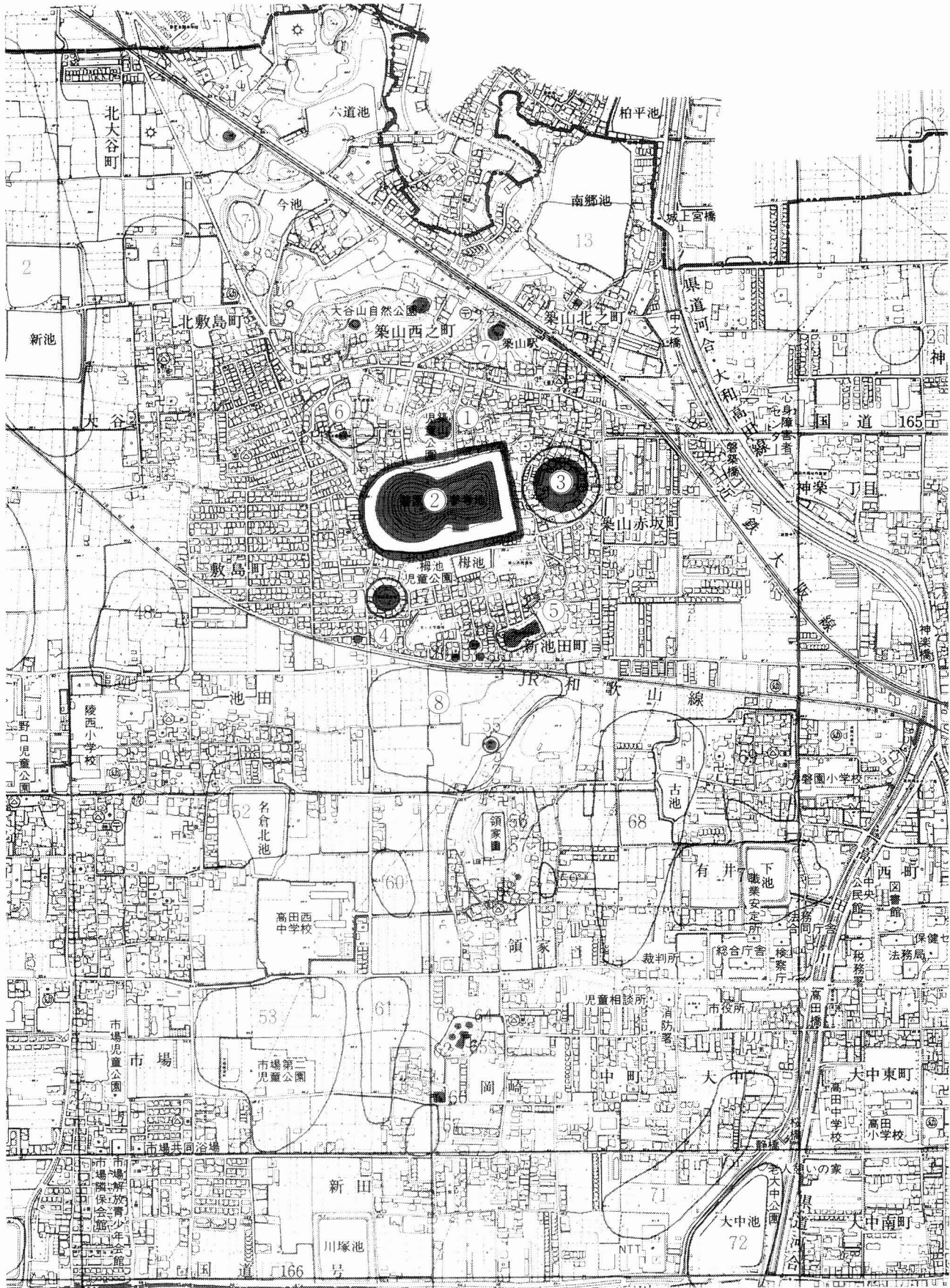


図1 かん山古墳と周辺の古墳 S=1/10000

- ①かん山古墳 ②築山古墳 ③コンピラ山古墳 ④茶白山古墳
- ⑤狐井塚古墳 ⑥古屋敷古墳 ⑦インキョ山古墳 ⑧池田遺跡

2、調査に至る経緯

かん山古墳は、築山児童公園の緑地になっており、市民の憩いの場として親しまれている。公園に造成されたのは戦後間もないころで、古墳とそれをのせる尾根、埋没した築山古墳の周濠の一部が買収された。かん山古墳の墳丘南側部分は、グラウンド造成のため尾根ごと切断され、法面加工された。そして墳丘には盛り土がされないまま、遊歩道や階段が削り込むように付けられ、植林がなされた。古墳である認識は、1958年刊行の「大和高田市史」への記載を待たねばならなかったようだ。

近年、墳丘随所で土砂侵食が進み、風水害による倒木で墳丘の一部が崩落したこともあった。95年には一部の遊歩道の路面に、埴輪列が樹立したまま露出する事態となった。このため大和高田市教育委員会は、将来古墳の保全事業は必至と考え、県教育委員会文化財保存課と協議の上、事業の発生までに古墳の保存状況や具体的な規模などを把握するための範囲確認調査を、3ヵ年かけて実施することになった。

古墳の名称については、築山児童公園古墳で扱われてきたが、調査にあたり地元の俗称である「かん山」を冠して呼ぶことにした。

3、調査の成果

調査は古墳が円墳であるという前提として、墳丘の北西側と西側2箇所にトレンチを設定した。以下調査の成果概要をトレンチごとに述べる。

第1 トレンチ

墳丘北西側の墳頂端部から裾に向けて設定したトレンチで、トレンチのほぼ中央で、列をなした4本の埴輪が樹立した、平坦なテラスが検出された。テラスは埴輪列から墳頂に向かって約2.8mの幅である。埴輪は基底部のみを残し、4本のうち3本が土砂崩落によって裾に向かって大きく傾いているうえ、遊歩道造成の際半分がえぐられるなど、辛うじて位置を留めている状況であった。またテラス上には中世に土壌が掘削されるなど改変を受けており、保存状況は良くなかった。

トレンチはテラス周辺で南側に拡張した。この拡張区の位置は、調査前から遊歩道の路面に埴輪列が露出していたところで、露出していた埴輪をすべて検出することを目的に設定した。計6本の埴輪基底部を検出するが、遊歩道造成により、既に7本ほどは失われていた。

土層堆積はトレンチ南側の断面を中心に観察した。結果テラスのやや上部を境に、墳丘上半部は人為的に盛り土し、下半部は地山を削り出して墳丘の形を整えていたことが判明した。

ただテラスについては、墳丘下半の地山を削り出した範囲にあたるが、その周囲の地山標高が低かったため、盛り土で嵩上げして造成した様子がサブトレンチ等で確認できた。埴輪列についても、テラスの盛り土造成の過程で樹立されていったようで、溝状の掘り方を掘って埴輪を立てるような方法は採られていなかった。

トレンチ全体を見て、この位置以外にテラスらしい遺構は検出できなかったため、かん山古墳は2段築成であると思われる。周濠やその痕跡は確認されなかった。

また墳丘の北西側は播鉢状に落ち込む地形が認められるが、その一部をトレンチの西北端に検出した。周囲では小土壙や焼土ピットなども見つかった。落ち込みの覆土からは瓦器の破片が出土しており、後世古墳が城砦等に利用されたと仮定した場合、落ち込みの底部が平坦なことから曲輪になる可能性もあるが、詳細は不明である。

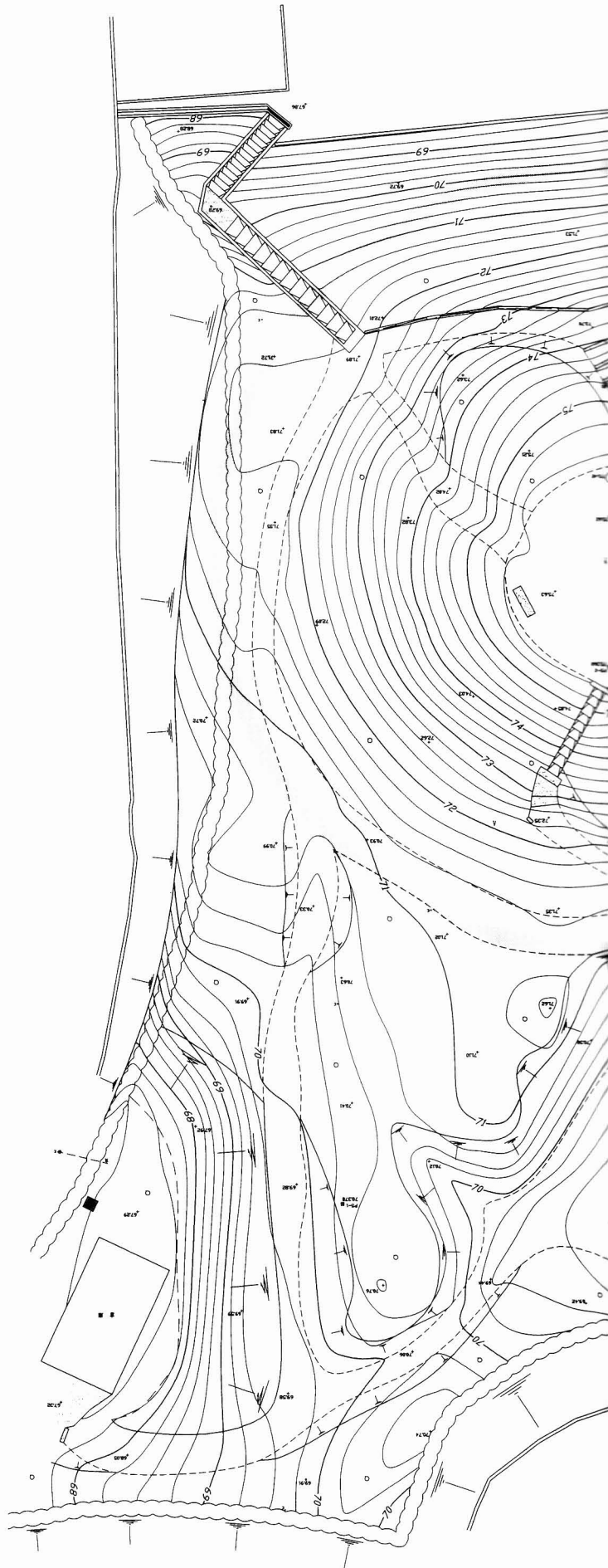
第2トレンチ

第1トレンチの南側に設定した。第1トレンチの成果を参考に、テラス検出の位置をある程度予測して設定した。

結果、墳丘斜面に設けられた、テラス、埴輪列を第1トレンチよりも良好な状態で検出できた。テラスの幅は、埴輪列の中心部から、墳頂部に向かって1.8mであった。第2トレンチ付近は第1トレンチ付近よりも地山の標高が高かったため、このトレンチで検出できた墳丘は、基本的に地山を削り出す作業で造成が可能だったようである。

埴輪は6本検出した。検出した埴輪は、いずれも基底部分だけを残している。盛り土造成せず、地山を削りこんで形成したテラスであるため、第1トレンチとは違って、あらかじめ掘削しておいた溝状の掘り方に、埴輪を並べて樹立させる方法が採られていた。掘り方は、一度掘ったものが埋められ、再度位置を少し改めた浅いものが掘りなおされ、埴輪はこれに埋め立てていた様子も観察できた。埴輪列の周辺でのみ盛り土の造成が確認されたが、テラスの形を整える程度のものであると思われる。

また埴輪列の中心から裾方向に向かって4.6m離れた斜面で、高低差約20センチほどの、人為的に施されたと思われる段差が検出できた。この段差の裾は第1トレンチと拡張区の斜面上で確認された、やはり自然のものとは考えにくい段差の裾とおおよそ同一円弧上にのせることができ、その中心は円丘の中心付近となる。即ちこの第2トレンチはじめ、各トレンチで確認された段差は、墳丘の裾として造成されたと考えられよう。



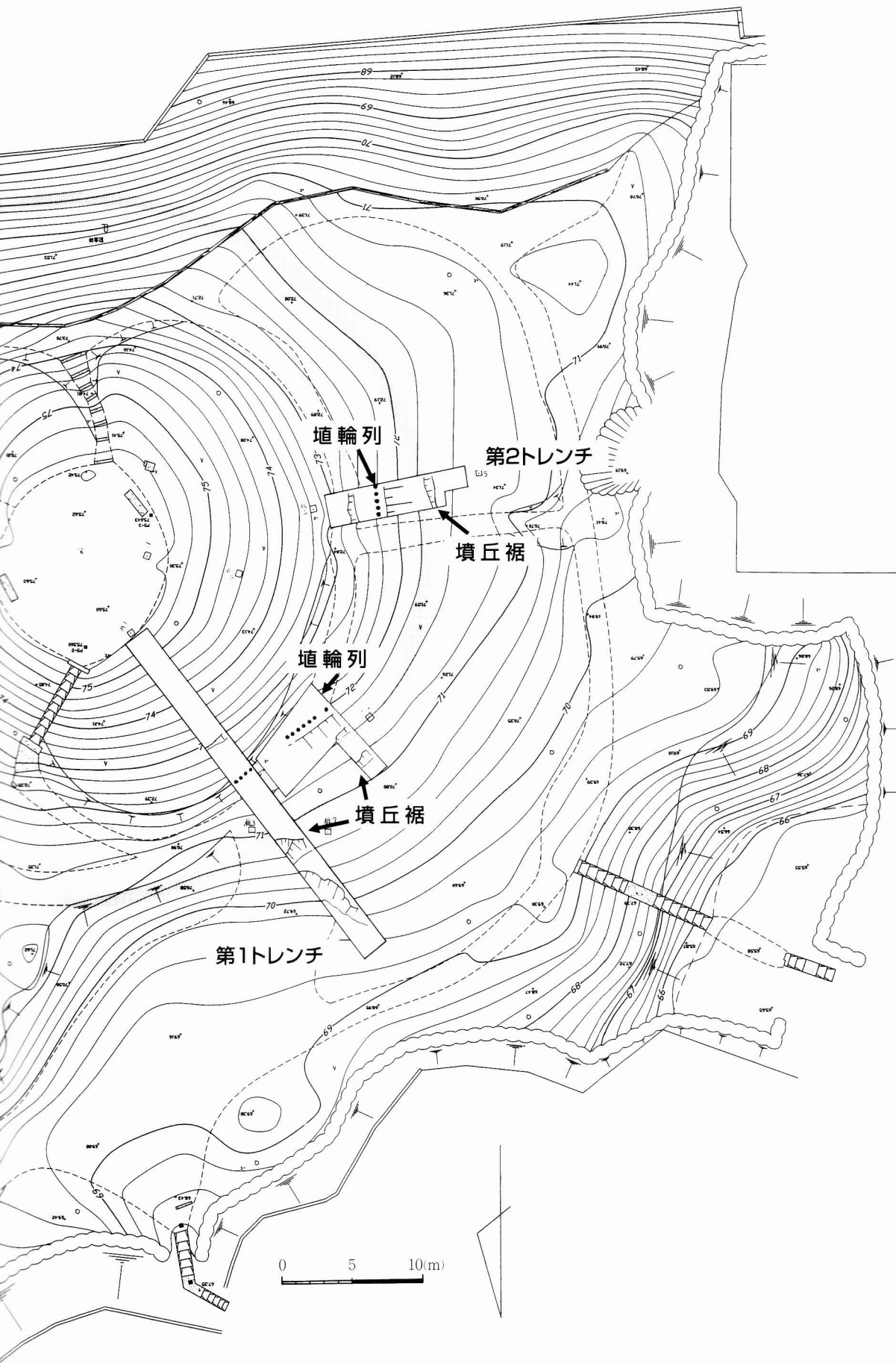
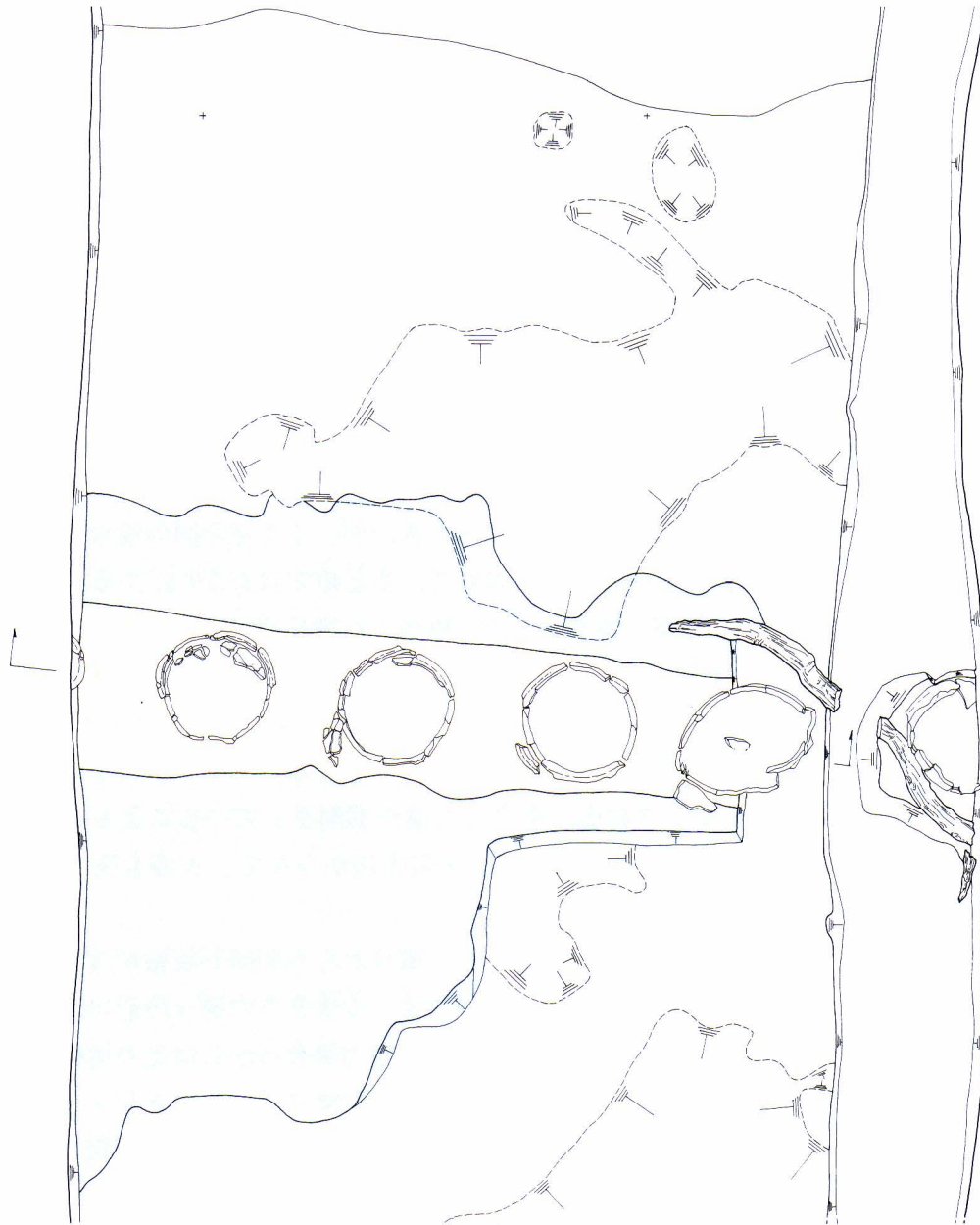
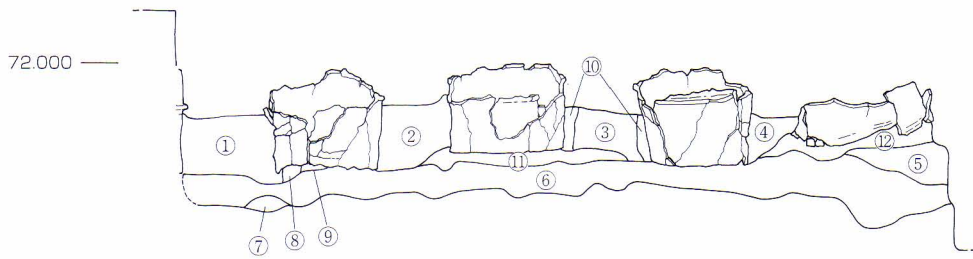


図2 かん山古墳測量図（トレンチ設定位置）



0 1m

□ … 盛土された部分
 □ … 溝状掘り方



- ① 7.5YR6/6橙色シルト混粘質土。10YR7/4にぶい黄橙色粘質土の小～中ブロックを10%含む。(下部に多め)
- ② 10YR6/6明黄褐色シルト混粘質土。3mm以下の砂を少しと10YR7/4にぶい黄橙色粘質土の小ブロックを全体に7%含む。
- ③ ②にほぼ同じだが、砂がやや多く、ブロックは少ない。(3%程度)
- ④ ③にほぼ同じだが、ブロックはほとんど見られない。
- ⑤ 7.5YR6/6橙色に7.5YR5/6明褐色が50%混じるシルト混粘質土。5mm程度の砂がやや多く、木の根によるかく乱を受ける。
- ⑥ 10YR6/6明黄褐色に10YR8/4浅黄褐色が小ブロックで20%混じる粘質土。シルトが多く、3mm程度の砂を少し含む。全体に植物の根の痕(黒色の鉄・マンガン中塊)が多い。
- ⑦ 10YR7/4にぶい黄橙色に10YR6/6明黄褐色が小ブロックで10%混じるシルト混粘質土。
- ⑧ 7.5YR6/6橙色の粘質土。砂はほとんど見られない。
- ⑨ 10YR8/4浅黄褐色に7.5YR6/6橙色が中ブロックで20%混じるシルト混粘質土。3mm程度の砂を少し含む。
- ⑩ 7.5YR6/8橙色の粘質土。3mm程度の砂を少し含む。
- ⑪ 7.5YR6/8に7.5YR7/6が50%混じる橙色の粘質土。3mm程度の砂を少し含む。
- ⑫ ⑪にほぼ同じだが砂が多い。

図3 第2トレンチ テラス検出状況と埴輪列立面図

第2トレンチで検出した段差は、他と比較すると高低差が少ない。これは第2トレンチ周辺が傾斜の緩い地形であり、周濠がないという前提に立てば、段差を大きくすることによって増える土砂の掘削、移動量を抑制するためと思われる。

4、まとめ

以上、かん山古墳の1次調査の概要を述べてきたが、ここで今回の成果について近接する円墳・コンピラ山古墳との対比をも含めて、まとめておくことにする。

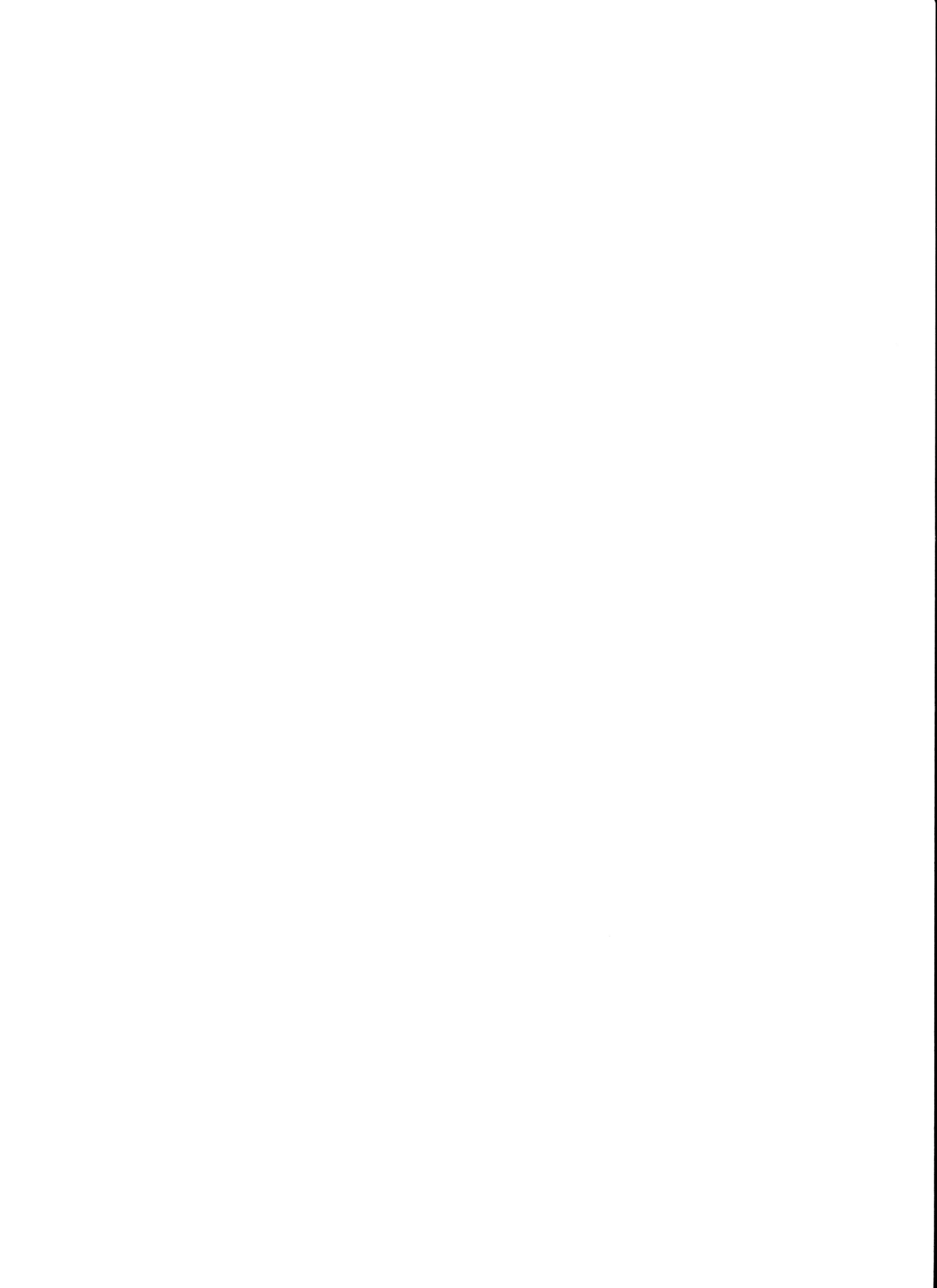
まず古墳の規模であるが、各トレンチで検出した墳丘裾で描くことのできる円弧によると古墳の直径はほぼ50メートルとなる。テラス1段を有する2段築成と考えられるが、円墳を前提に考え、築造時期が近くかん山の倍の規模をもつコンピラ山古墳も2段築成であることを踏まえれば、ふさわしい構造と思える。トレンチによってテラスの幅に差があるが、第1トレンチの方は中世に土壌が掘削されていることもあり、後世に改変された可能性もある。墳丘に葺き石は築造当初からなく、周濠も検出されていない。

埴輪は、合計16本を検出した。黒斑があり、破片からも朝顔形埴輪が含まれていたことがわかる。コンピラ山古墳の埴輪は、個体によって大きさの違う円形の透かし穴が基底部に穿たれたものが含まれているが、かん山古墳の場合透かしはどの埴輪の基底にも認められなかった。埴輪列の樹立方法は、それほど離れていないトレンチで異なっていた様子が観察できたが、単に築造作業上の合理性から生じたものと解釈した。コンピラ山の埴輪内から出土したような小型土器は、今のところ認められていない。家形埴輪と思われる破片1点と盾形埴輪の破片1点も出土しており、墳頂部に器財埴輪があったことが裏付けられる。今回出土した埴輪の特徴から、かん山古墳の築造は5世紀前半に位置づけることができよう。埋葬施設から流出したと思われるような遺物の出土はなかった。

第2トレンチに堆積していた墳頂方向からの流土や、第1トレンチの播鉢状落ち込みの覆土などから瓦器など中世土器が出土した。第1トレンチでは別の位置で中世の遺構も検出されたことから、かん山古墳も、築山古墳やコンピラ山古墳と同様、城砦に利用された可能性がある。

かん山古墳の検証は、まだ緒についたばかりであるが、今後年度追うごとの調査で、徐々に古墳の実体が明らかになっていくことを期待したい。

圖 版

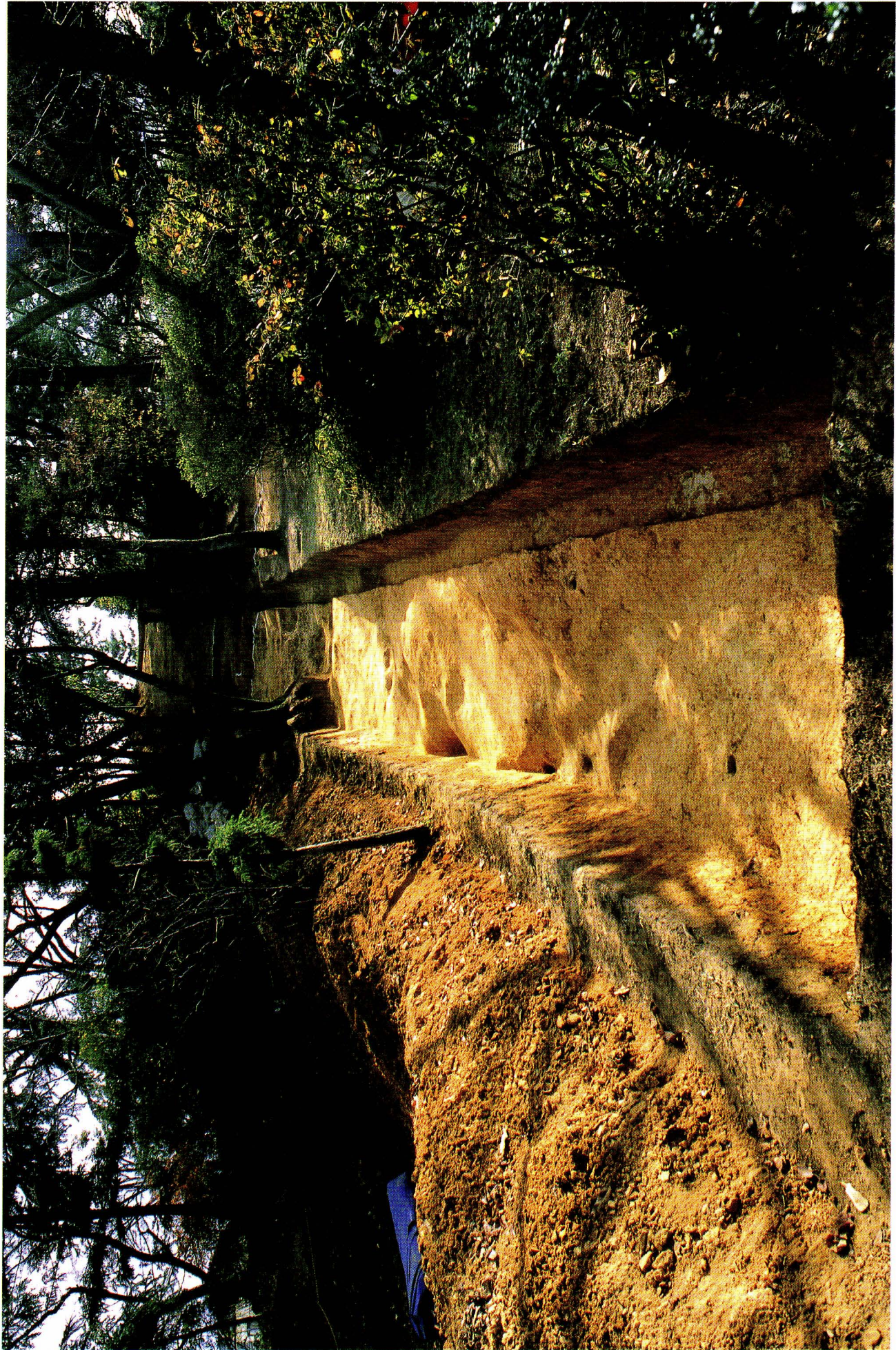




かん山古墳と周辺の古墳（99年3月撮影）



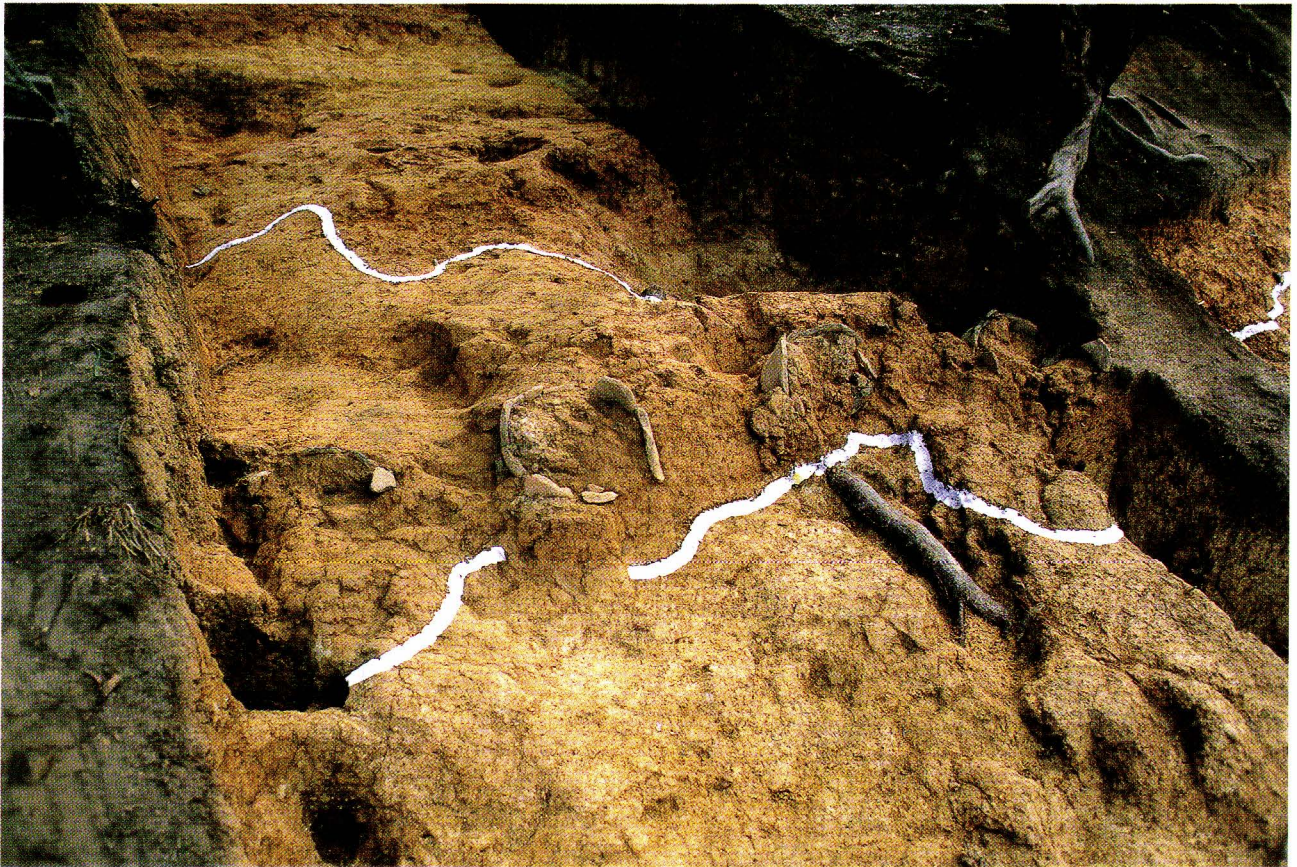
かん山古墳 墳丘を北から望む



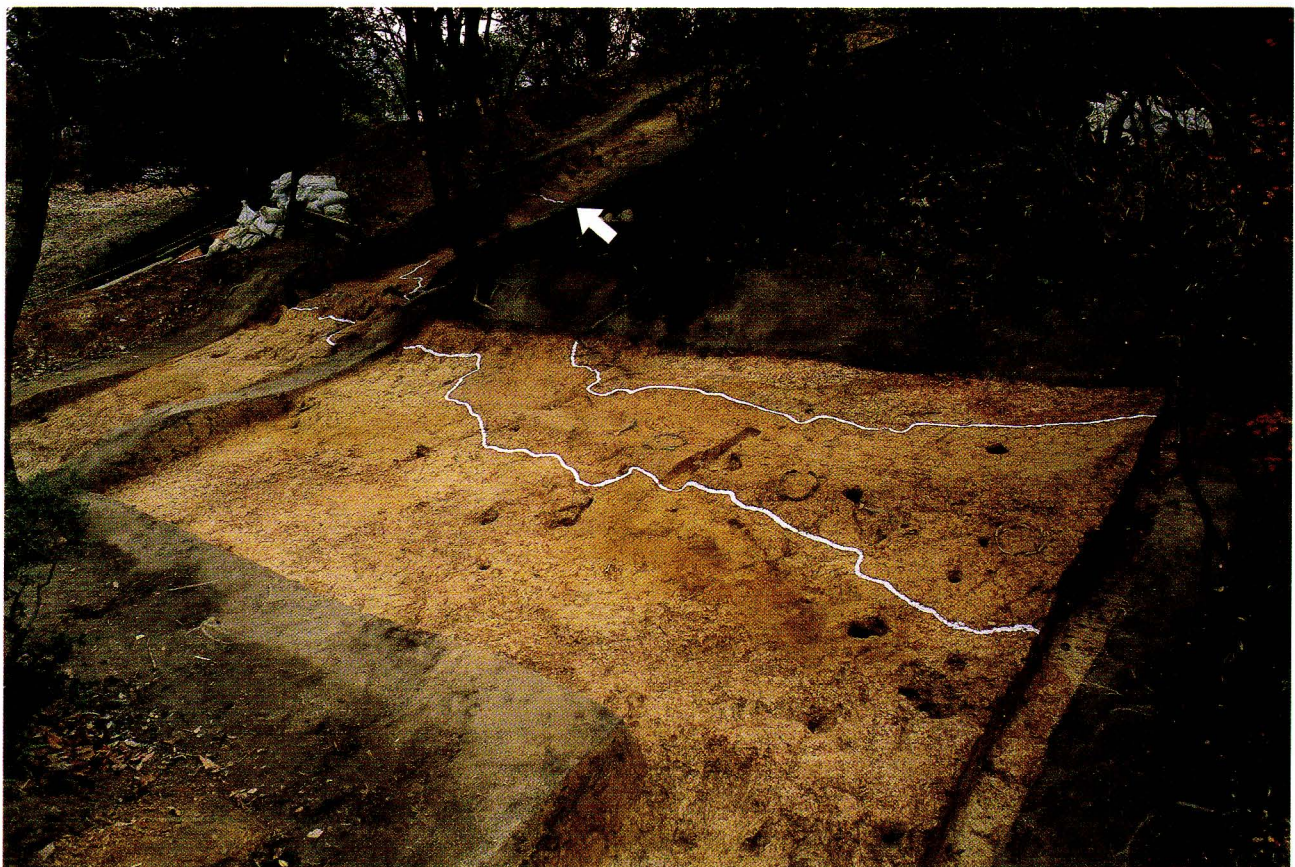
第1トレンチ 完掘状況（裾側から墳頂方向を望む）



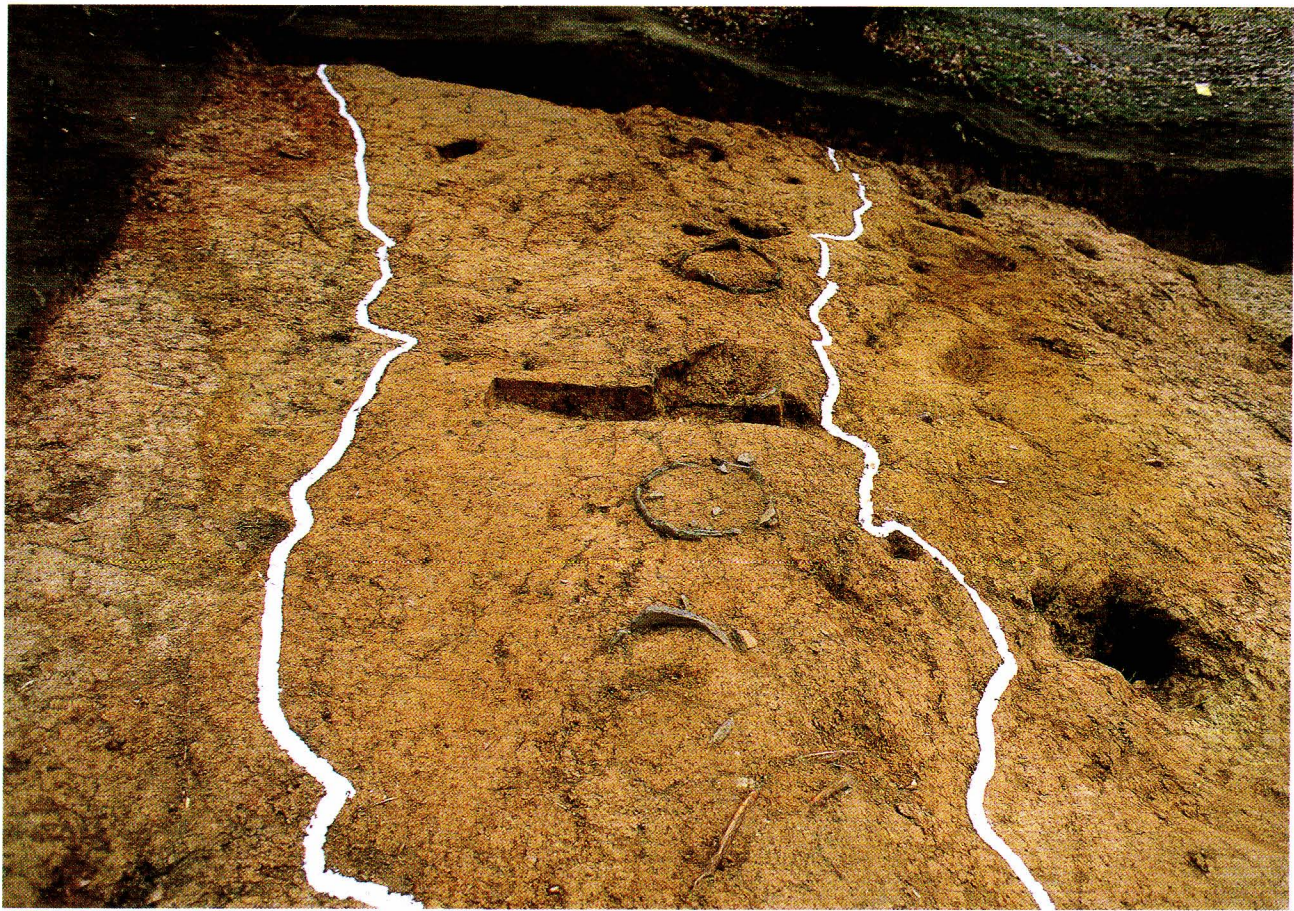
第1トレンチ 完掘状況（墳頂から裾方向を望む）



第1トレンチ 埴輪列・テラス検出状況（白線で囲まれた部分は盛り土である）



第1トレンチ拡張区 完掘状況（矢印白線は地山と盛り土の境界を示す）



第1トレンチ拡張区 埴輪列検出状況（白線で囲まれた範囲が盛り土である）



第1トレンチ拡張区 墳丘裾検出状況



第2トレンチ 完掘状況（墳丘から裾方向を望む）



第2トレンチ 完掘状況（裾側から墳丘方向を見る）



第2トレンチ テラス検出状況



第2トレンチ テラス検出状況



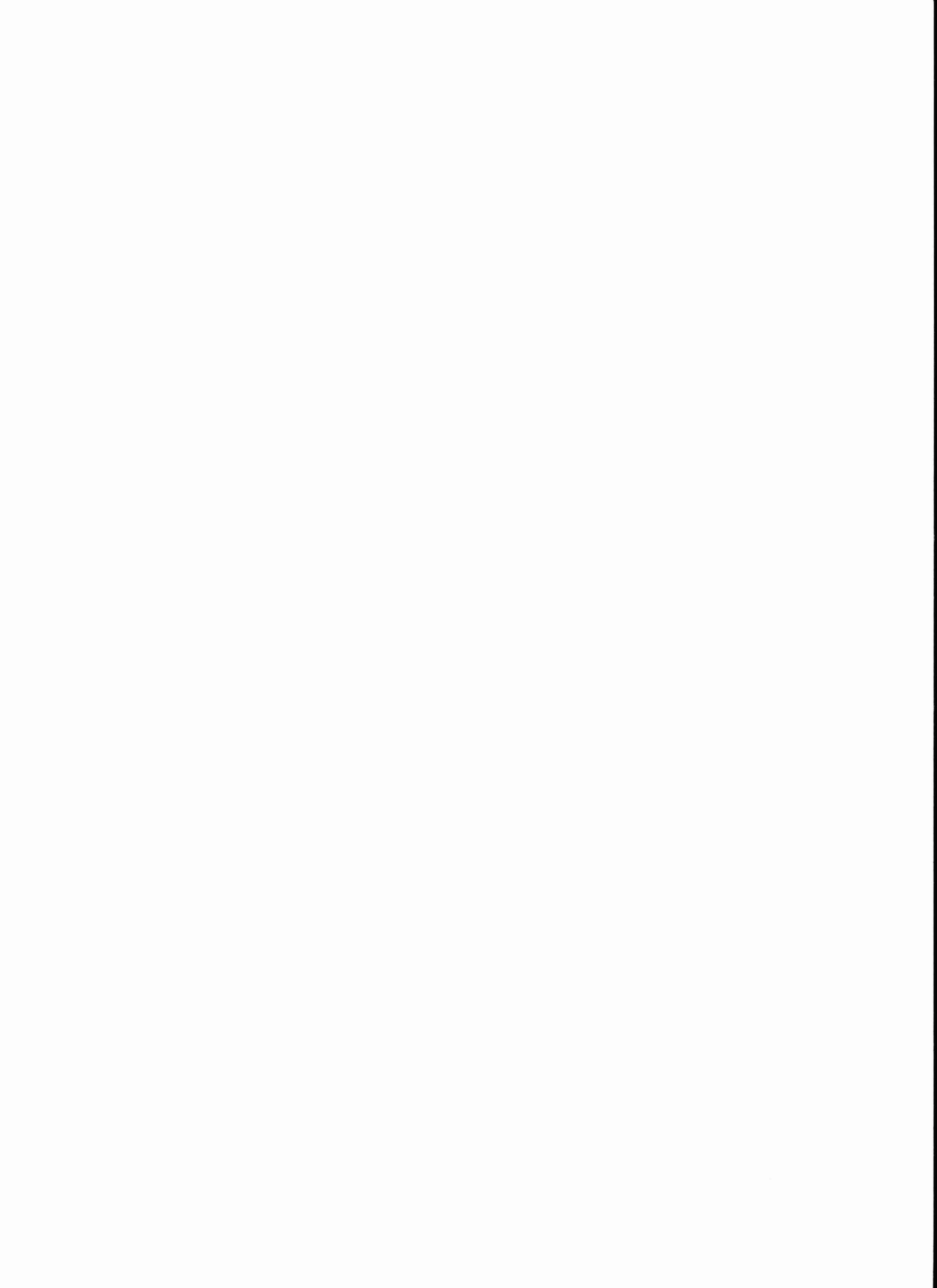
第2トレンチ 埴輪列検出状況



第2トレンチ 古墳裾検出状況

報告書抄録

書名 かん山古墳 第1次発掘調査概要報告書
副書名
巻次
シリーズ名 大和高田市教育委員会埋蔵文化財発掘調査概要報告
シリーズ番号
編著者名 前澤郁浩
編集機関 大和高田市教育委員会
所在地 奈良県大和高田市三和町2-19
発行年月日 2003年3月31日
所収遺跡名 かん山古墳
種別 古墳
主な遺構 墳丘、テラス、埴輪列
主な遺物 埴輪、瓦器、土師器
所在地 奈良県大和高田市築山487
特記事項
コード (市町村) 29202 (遺跡番号) 13-B-33
北緯 34 31 16.5682 (測量図中、基準杭1の数値)
東経 135 44 03.0402 (測量図中、基準杭1の数値)
調査期間 2002年10月2日～03年2月28日
調査面積 60 m²
調査原因 国庫、県費補助による範囲確認調査



かん山古墳 第1次発掘調査概要報告

2003年3月31日

発行 大和高田市教育委員会
奈良県大和高田市三和町2 - 19

印刷 川村印刷所
大和高田市永和町1番6号

